

## 初期ジャイナ教の教理 研究ノート

—*Jyāraṅga* I-1-1—

杉岡 信行

古層に属すると見做されているジャイナ・アীগマの中に、初期ジャイナ教の教理が形成されて行く過程を認める作業の一環として、*Ay (araṅga-sūtra)* 第一篇の冒頭をとりあげ、テキストの和訳を試みる。さらに他のジャイナ・アীগマと原始仏典とから比較すべき資料を提示し、多少の考察を加える。

底本として W. Schubring の校訂本 (1910, re. 1966) を使用。他のエディションとして H. Jacob (1882) と Muni Jambuvijaya (1977, 1978) の二本をも参照する。

長寿者よ、私は聴聞した。

かの尊者(マハーヴィーラ)はかくのごとく語った。

ここ「なる輪廻界」で、ある人々に「次のような」想念がないとする。すなわち、「私は東方からやって来たのであるのか。あるいは南方から、あるいは西方から、あるいは北方から、あるいは上方から、あるいは下方から、あるいは一方向から、あるいは中間から私はやって来たのであるのか」——かくのごとくある人々は「次のことを」知らない。「私の靈魂は再生するののか、私の靈魂は再生しないのか。私は(かつて)何であったのか。あるいは私は、ここから死没した後、何になるのだろうか」<sup>②</sup>。(Jy. I-1-1~3)

## 註

- ① 方位については、例は *Tāraṅga* 第十章には、いわゆる *disā-padam* があり、東、東南、南、南西、西、西北、北、北東の八方位に、上方と下方を加えた、十方位を数えている。私はここから死没した後、何になるのだろうか——原文は *ke (vā) io cūo iha peccā bhavissāmi ?* であるが、これは原始仏典にバラレルを指摘できる。 *Suttanīpāta* 第四章 *Aṭṭhaṅga* の第 774 偈 *d. pāda* に *kim su bhavissāma iio outāse* とある。

また、ある人々は自分の知識によってか、他からの教えによってか、あるいは他者に近待して聴聞し、次のことを知っている。すなわち、「私は東方からやって来たのであるのか。(省略)あるいは一方向から、あるいは中間から私はやって来たのであるのか」——かくのごとくある人々は「次のことを」知っている。「私の靈魂は再生する。ここなる方向から、あるいは中間から彷徨しているのであり、すべての方向から、すべての中間から「彷徨して」いる者が、私である」と。(Jy. I-1-4)

## 註

- ① 靈魂は再生する——*āyā nvaṅgā*. ジャイナ教の伝統によると、*nvaṅgā* に対して空衣派は *skt. aupapādika-* を与え、白衣派は *aupapāṭike-* を与える。学僧 *Umasvāti* の綱要書 *Tattvarthadhigamaśāstra* では、*upapāda-* と *aupapādika-* は「突発性」の者<sup>①</sup>として、地獄と天界の二界に忽然として生れること「者」と規定される。しかし、初期ジャイナでは *nvaṅgā-* は、地獄と天界の二界への再生という規定は必ず

しも受けない。

彼は靈魂を信じる者であり、世界を信じる者であり、業 (ka-mma) を信じる者であり、行為を信じる者である。

「私は為したし、<sup>①</sup> また私は (人をして) 為さしめよう、そして私は為しつづつある者を認めるだろう」——これらはこの世間ですべての業の発動であると知捨すべきである。業を知捨しないその男は、こなる方向から、あるいは中間から彷徨する。あらゆる方向から、あらゆる中間から再生し、多くの形態をもつ胎内から再生し、様々の苦惱を感受する。(Ay. 1-1-5-6)

註

① 私は為した——底本には karissam とあるが、諸本では akarissam とアオリスト・アウグメントを付けた語形である。ここでは諸本にしたがう。

② 私は為したし、また私は (人をして) 為さしめよう、そして私は為しつづつある者を認めるだろう——akarissam c' aham, karāvassam c' aham karao yāvi samānūne bhavissāmi. この表現は、初期ジャイナでは五大誓戒等を遵守する場合の否定的文脈による定型句として散見される。例は、*Dasa-yaṭṭiya Sutta* 第4章に「生ある限り、三種三様に、意により、語により、身によりて、我れは為さず、我さしめず、為しつづつある他の者をも認めず (na karemi na kāravemi kare-taṃ pi annam na samānūjānāmi)」（松濤誠廉訳）とある。<sup>③</sup> 知捨すべきである——parijāṇyeva (pari-v/ṭhā). 同語根からの派生語 pariṇā, pariṇāya がテクニカル・タームとして見られるが、その概念については学僧 Sīlānka は、註釈

で「遍知〔する〕」と「棄捨〔する〕 (pratyakata)」の二義を与える。

そこで尊者は、知捨について説いた。

まさにこの生存は、贊美〔され〕、尊敬〔を受け〕、祭式〔をする〕ためにあり、生〔れること〕と死〔ぬこと〕と解放〔されること〕のためにあり、苦を減するためである——「とすれば」これらはこの世間ですべて業の発動であると知捨すべきである。この世間でこれらの業の発動を知捨する者は、業を知捨したる牟尼である。かくのごとく私は言う。(Ay. 1-1-7)

註

① 生と死——jati-marāṇa- (jati-marāṇa-) は、仏教・ジャイナ教を問わず「生死」としてよく連合して使用され、否定的文脈に見られる。その用例として、Ay. 1-2-3-3 に jati-marāṇam pariṇāya とあり、この pari-v/ṭhā- は「捨つる」の意である。(矢島道彦『印仏研』29-2)

一方 Ay. 1-1-1-3 に見る uvavāya- (再生) と cūa- (cyuta- / v/cyu-, 死没) もよく連合して使用されるが、靈魂の輪廻の死生に関連して見られ、jati-marāṇa- とは別概念と考えられる。

以上 Ay. 1-1-1-7 の訳示し、紙数の許すかぎりの註を施した。一般に Ay. 1 は最古層に属すると見做されているが、必ずしも自明のこととは考えていない。パラレルの発見は重要な作業であり、いわば地層学における示準化石発見のようなものである。